「はるかに勝るキリストの恵み」

（ローマ５：２―１２）

2018.4.22

初めに、もう一箇所聖書をお読みします。エペソ人への手紙２章１節から10節。

「さてあなたがたは、先には自分の罪過と罪とによって死んでいた者であって、かつてはそれらの中で、この世のならわしに従い、空中の権をもつ君、すなわち、不従順の子らの中に今も働いている霊に従って、歩いていたのである。また、わたしたちもみな、かつては彼らの中にいて、肉の欲に従って日を過ごし、肉とその思いとの欲するままを行い、ほかの人々と同じく、生れながらの怒りの子であった。しかるに、あわれみに富む神は、わたしたちを愛して下さったその大きな愛をもって、罪過によって死んでいたわたしたちを、キリストと共に生かし―あなたがたの救われたのは、恵みによるのである―キリスト・イエスにあって、共によみがえらせ、共に天上で座につかせて下さったのである。それは、キリスト・イエスにあってわたしたちに賜わった慈愛による神の恵みの絶大な富を、きたるべき世々に示すためであった。あなたがたの救われたのは、実に、恵みにより、信仰によるのである。それは、あなたがた自身から出たものではなく、神の賜物である。決して行いによるのではない。それは、だれも誇ることがないためなのである。わたしたちは神の作品であって、良い行いをするように、キリスト・イエスにあって造られたのである。神は、わたしたちが、良い行いをして日を過ごすようにと、あらかじめ備えて下さったのである。」

今日22日は、角田芳伸兄が召されてちょうど1年となる日であります。その2日前に、大坂力兄が急死されて、そのお別れ会の準備をしている土曜日の昼のことでした。「あれから1年になるのか」と、表現しがたい思いを覚えながら、今日を迎えました。

その角田兄姉が私たちの教会の礼拝に何十年ぶりかで出席されるようになりましたのは、２年前の山口明雄師のご葬儀に参列されたことがキッカケでありました。その山口師の葬儀の中で読まれたのが、今お読みしましたエペソ２章の前半のところです。山口師の愛唱聖句が、この8節、「**あなたがたの救われたのは、実に、恵みにより、信仰によるのである。それは、あなたがた自身から出たものではなく、神の賜物である**」。

今、このエペソ２章を読んでいてお気づきになったかもしれませんが、この箇所は、私たちが今朝読んでいるローマ５章と似たような言葉が幾つも出てまいります。罪過、不従順、死、恵み、賜物などです。同じ使徒パウロが書いた手紙であるため、言葉や内容が似ているのは当然のことであります。その中で３節にこうあります。「**また、わたしたちもみな、かつては彼らの中にいて、肉の欲に従って日を過ごし、肉とその思いとの欲するままを行い、ほかの人々と同じく、生れながらの怒りの子であった**」。ローマ５章と同じ内容を示す表現として、ここに「**生れながらの怒りの子であった**」とあります。「**怒りの子**」というのは、性格が怒りっぽい、という意味ではありません。新共同訳聖書では、「**生まれながら神の怒りを受けるべき者でした**」と訳します。

生まれ落ちたときから、私たちは神の怒りを受けるべき罪の子だったという。先週、原

罪という言葉を使ってお話ししましたが、私たち全ての人は、生まれたときから罪を負って生きている。「**わたしたちもみな**」とここにあるように、全ての人は例外なく罪人であり、「**生れながらの怒りの子**」である、という。

これは、先週から読んでいるこのローマ所の箇所でパウロが語っていることと全く同じことであります。このローマ5章の表現で言えば、「わたしたちもみな、生まれながらのアダムの子であった」ということでありましょう。最初の人アダムが罪を犯したことにより、私たち全ての人間は罪人となった。そのことが5章12節でこうあります。「**このようなわけで、ひとりの人によって、罪がこの世にはいり、また罪によって死がはいってきたように、こうして、すべての人が罪を犯したので、死が全人類にはいり込んだのである**」。神によって造られた人間世界の中に、アダムという一人の人を入り口にして、罪と死が入り込んだ、という。

その罪と死の力は私たち人間を圧倒してしまい、人間には抵抗する力もなく、罪と死によって完全に支配されてしまった、という。「支配」という言葉が何度かこの5章に出てきますが、「王になる」という意味です。罪と死が、私たちにとっての王となってしまっている。どんな人も、このアダムをとおして入って来たこの罪と死の支配から逃れることはできない。

聖書学院教会の小林和夫師は、このことをこのようなたとえで説明します。アダムをとおして人類の中に罪が入ってきたというのは、それはちょうど一本の川の源流に毒物が放り込まれたようなもの。そのために、その汚染が下流に生きる人たちにも及んだ、という。どんな人も、アダムから始まった人類という川の流れの中にいるために、アダムの罪を受け継いで、その罪の力からは誰一人として逃れることはできない。それゆえ私たちは皆、生まれながらの怒りの子、アダムの子である。

このことを、神学において難しい言葉を使いますと、「集合人格」という言葉によって説明したりいたします。アダムという人は、一人の個人を表すのではなく、全人類を代表する人格である。それ以後に生まれた全ての人は、最初の人アダムとつながっている一人一人。そのため、全ての人間は、アダムという最初の人に連帯して、そこですでに罪を犯したのだ。そのことが18節を見ますと、「**ひとりの罪過によってすべての人が罪に定められた**」とあります。アダムが罪を犯したとき、そこでもう全人類に対して有罪判決が下った、という。

この箇所は本当に難しい箇所で、どう話せばいいのかなあと悩むところですが、パウロがアダムのことを持ち出してきて、私たちが、全ての人がアダムの子であることに拘るのは、キリストによる救いの恵みを語りたいがためであります。私たちが罪人とされたのは、最初の人アダムのせいだ、アダムの責任だ、ということをここで語りたいわけではない。そうではなくて、私たちが最初の人アダムと連帯している存在であることを明確にすることによって、その罪に支配されている全人類のために、御子キリストが十字架で死んでくださった、という救いの恵みを語るためであります。キリストによる救いの恵みは、アダムの子として生まれた全ての人に、すなわち、あなたにも及んでいるのだ、とパウロは語りたい。

そのために、先週もお話ししましたが、新共同約聖書ではこの箇所は「アダムとキリスト」と小見出しをつけていますが、アダムとキリストを対比させながら、救いの恵みを語ります。14節の終わりに、「**このアダムは、きたるべき者の型である**」とあります。「**きたるべき者**」とは、次の15節にある「**ひとりの人イエス・キリスト**」のことです。この「**型**」という言葉は、新改訳では「**ひな型です**」と訳されています。アダムのほうが「**ひな型**」ということは、キリストのほうが「原型」ということです。「**型**」と訳されている言葉は、ギリシャ語では「テュポス」という言葉で、英語では「タイプ」。この「テュポス」というのは、もともとは「打つ」という意味です－英語の辞書で調べてみましたら、ちゃんと「ギリシャ語で『打つ』という意味」と書かれていました。たとえば、金槌で何か堅い物をトントンと打つと、そこに跡が残ります。その残った跡のことを「テュポス－型」と呼んだそうです。タイプライターなどはまさにそうで、カタカタとキーを打つことによって、そこに字が刻まれる。新約聖書でこの「テュポス」という言葉が使われている有名な箇所がありますが、ヨハネ福音書20章の終りのところで、主イエスの復活を疑う弟子トマスの言葉です。トマスはこう言った。「**わたしは、その手に釘あとを見、わたしの指をその釘あとにさし入れ、また、わたしの手をそのわきにさし入れてみなければ、決して信じない**」（20：25）。十字架で釘を打たれたそのあと。主イエスの手にあるその「あと」を見れば信じる。そうじゃないと信じないと言った。その「（釘の）あと」という言葉がテュポスという言葉です。主イエスの手に釘のあとがあるということは、このお方は、確かに十字架で釘打たれたということを指し示す。

ここでは、アダムはあくまで「**あと（ひな型）**」であって、そのアダムの存在は、来るべきお方、イエス・キリストという原型を指し示しているのだ、という。ですから、新共同訳聖書はこの14節の終わりをかなり意訳していて、「**実にアダムは、来るべき方を前もって表す者だったのです**」と訳します。型であるアダムを見ることによって、救い主キリストがどのようなお方であるのかが分かる。パウロは、コリントの手紙では、やはりアダムとキリストを対比させて、アダムのことを「**最初のアダム**」と語り、キリストのことを「**最後のアダム**」と表現しています（第1コリント15：45）。

そのように、主イエス・キリストを最初の人アダムとの関わりの中で述べるのは、このお方によって、第2のアダムと呼ばれるこのお方によって、最初の人アダムによってもたらされた罪と死の支配を打ち破るのだ、と言いたい。18節を見ますと、「**このようなわけで、ひとりの罪過によってすべての人が罪に定められたように、ひとりの義なる行為によって、いのちを得させる義がすべての人に及ぶのである**」。アダムの不従順によって全ての人が罪人とされたが、第2のアダムとして人となられたキリストの十字架によって、全ての人が罪から救われる道が開かれたのだという。皆さんもそういう絵を見たことがあるかも知れませんが、幼子イエスが母マリヤに抱かれているとき、その手にりんごを持っている、そのような聖母子像が描かれています。あれは、食べてはならないと言われていた木の実を食べたアダムが犯した罪の力にキリストがすでに打ち勝っておられる、ということを意味しているといわれます。キリストは、

アダムによってもたらされた罪と死の支配に打ち勝たれたのだ。

それによって、私たち人間を罪と支配から解放し、このパウロの言葉で言うならば、恵みと義の賜物を与え、永遠の命を得させてくださった、という。アダムという人をとおして、人類という川の源流に罪という毒物が投げ込まれ、その川の流れが汚染されてしまったが、その途中で、キリストによって新しい流れが注ぎ込まれた。死んでいた水を甦らせるところの、そこに命を与えるところの新しい流れを注ぎ込んでくださった。そのキリストによって、新しい命という恵みの賜物が全ての人にもたらされた、という。

私たちの実感としては、そうは言っても罪の持つ力に圧倒されて、キリストの恵みよりも、罪の力のほうがはるかに強いと思ってしまう。キリストの恵みよりも、罪の持つ力のほうが勝っていると感じてしまう。けれどもパウロは、「そうではない！」と言います。アダムとキリストを対比して語りながらも、本当は比較になんかならないのだ、神の恵みの支配ははるかに勝っていて、罪の力を圧倒しているのだ、と言う。

その比較にならないほどのキリストの恵みの力について、口語訳では「**まして**」という言葉を繰り返し使って表現しております。15節を見ますと、「**しかし、恵みの賜物は罪過の場合とは異なっている。すなわち、もしひとりの罪過のために多くの人が死んだとすれば、まして、神の恵みと、ひとりの人イエス・キリストの恵みによる賜物とは、さらに豊かに多くの人々に満ちあふれたはずではないか**」。17節でも、「**もし、ひとりの罪過によって、そのひとりをとおして死が支配するに至ったとすれば、まして、あふれるばかりの恵みと義の賜物とを受けている者たちは、ひとりのイエス・キリストをとおし、いのちにあって、さらに力強く支配するはずではないか**」。罪の力とキリストの恵みの力とを天秤にかけて比べようとしたら、比較のしようがないほどに、キリストの恵みの力、その重さが圧倒しているのだ。15節の初めのところ、新共同訳では「**しかし、恵みの賜物は罪とは比較になりません**」と訳します。比較になんかならないのだ。

その比較にならないほどのキリストの恵みの大きさについて、「**満ちあふれる**」という表現で繰り返し語ります。15節にありましたね、「**まして、神の恵みと、ひとりの人イエス・キリストの恵みによる賜物とは、さらに豊かに多くの人々に満ちあふれたはずではないか**」。17節でも、「**まして、あふれるばかりの恵みと義の賜物とを受けている者たちは**」。そして20節で、「**罪の増し加わったところには、恵みもますます満ちあふれた**」。この「**満ちあふれる**」という言葉は、「洪水のようになる」という意味です。夏など豪雨によって大きな川の水があふれ出して、濁流となって近くにある家々を軽々と押し流してしまうことがあります。キリストの恵みは、罪と死の支配を押し流し、圧倒し、私たちを神の命に生きる者とするという。

この20節の有名な聖句、「**しかし、罪の増し加わったところには、恵みもますます満ちあふれた**」、この聖句はよく、「私たちの罪意識が深くなればなるほど、キリストによる恵みもいよいよ深く分かるようになる」という意味で受け止められます。確かに、私たちの信仰生活は、そのように感じることがあるだろうと思います。クリスチャンになったば

かりのときは、罪と言われても、正直に言うと、自分の罪がよく分からなかった。そのために、主イエスが私のために十字架にかかってくださった、と言われても、その恵みの大きさ、有り難さが本当にはよく分かっていなかったということがあります。しかし、信仰生活が進むにつれて、自分がこれほどまでに徹底した罪人だったのか、という罪意識に圧倒されてしまって、それで、その私を救ってくださるキリストの恵みが、どれほど大きなものであるかが分かるようになる。

ただ、この箇所でパウロが直接語ろうとしていることは、私たちの信仰生活で起こってくるそのような恵みの経験を直接言っているのではありません。この20節では、「**恵みもますます満ちあふれた**」とありますように、これは過去に起こった出来事として語られています。すなわち、パウロはキリストが私たちのために十字架にかかって死んでくださった、というあの出来事、あの一点をここで指し示しています。主イエスが十字架にかけられたとき、それは人間の罪深さが間違いなく頂点に達したときでありましょう。人間たちが、神の子キリストを十字架につけて殺すという、神を完全に否定し、抹殺するというような、これ以上ない大きな罪を犯したときであります。けれどもその十字架は同時に、神の敵であった私たちを、生まれながらの怒りの子であった私たちを救おうとして、神の子キリストがご自分の命を差し出してくださった恵みの時であります。パウロは、あのキリストの十字架を指し示しながら、「**罪の増し加わったところには、恵みもますます満ちあふれた**」「あふれ出してその恵みがこの私にも届いた！」と喜びの知らせを語る。これは、どちらの力がより大きいか、などと比較できるようなものではなく、あふれ出して、こんな罪人のところにも、その恵みは、私を罪の子どもから神の子どもへと変えてしまうほどの圧倒的な力を持っているという。

私たちがこのローマ書5章の後半を読みますと、最初の人アダムとのつながりを言われると、それを拒絶するような思いが生まれるかもしれません。アダムが罪を犯したために、人類の中に罪と死が入り込み、全ての人は罪に定められ、生まれながらに罪を負っている、と言われる。なぜ、アダムの罪の責任を私たちも負わされなければいけないのか。だいたいアダムが罪を犯したとき、私たちはこの世に生まれてもいなかったし、そもそもアダムが代表になることなんて、こっちは了承なんてしていない。勝手に代表になっている。頼みもしないのに、アダムが勝手に罪を犯して、そのアダムの罪の結果をなぜ私たちも負わされなければいけないのか、いい迷惑だ、というわけです。

でもパウロは、そういう私たちに語ります。私たちの神は、頼みもしないのに、独り子キリストをこの世に遣わしてくださったではないか。私たちが頼みもしないのに、私たちの罪をキリストに負わされたではないか。そのキリストは私たちのために、それこそ頼みもしないのに、十字架で死んでくださった。私たち全ての人を、アダムによってもたらされた罪と死の支配から解き放つために、アダムと全く同じところに身を置かれた。神が人となるということは、アダムと同じところに身を置かれたということです。私たち罪人と同じ場所に、罪人と連帯するために、人となってくださった。最初の人アダムと同じ人間となり、罪人と一つになり連帯されたキリストが、私たちの罪を負って十字架にかかってく

ださった。アダムの子として、アダムの罪を負っている私たちを救うために、御子キリストはどうしても私たちと同じ人間になる必要があったというわけです。罪人と連帯し、私たちの代表として、十字架において、神の裁きをその身に受けてくださいました。「**わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか**」（マルコ15：34）と、私たちに代わって神に捨てられるという苦しみを、裁きを受けてくださいました。

私たちは今、第2のアダムとして来られたキリストにつながることによって、罪と死の支配から解き放たれて、神を信じて生きる、新しい命に生きることができる。最初の人アダムとのつながりで生きるのではもうありません。人となって来られたキリストとつながって、アダムの子でなく、怒りの子ではなく、神の子として生きる。そのことを語ろうとして、パウロは続く6章で、イエス・キリストの死と復活につながるバプテスマ、洗礼について語ります。私たちがなぜ、キリストの十字架はこの私のためである、と言えるのか？単なる思い込みなのか、思う力が強ければそれでいいのか。そうではない、ちゃんと根拠がある。それは、キリストが人類と一つとなり、洗礼を受けてくださった。そして私たちも、キリストと一つとなる洗礼を受けることによって、イエス・キリストと結ばれるという確かな土台がある。6章でそのことをお話したいと思いますが、だからこそ私たちは、洗礼をとおして、今やキリストに結ばれて一つとなっているということができる。

もし私たちが、最初の人アダムとの関わりを否定するとき、罪人と連帯しようとして人となって来られたキリストとの繋がりも失ってしまうことになる。あのキリストの十字架は、この私を罪の滅びから救い出すためにであった、と言うことができるのは、キリストと洗礼によって結ばれることによってであります。パウロはガラテヤの手紙ではこう語ります、「**あなたがたは皆、信仰により、キリスト・イエスに結ばれて神の子なのです**」（3：26／新共同訳）。

私たちは、自分のうちに働く罪の力に圧倒されて、私はダメだと思ってしまうことがあるかもしれません。けれどもパウロは、「恵みの賜物は罪とは比較になりません」と言います。16節の後半は、新共同約聖書はこう訳します。「**恵みが働くときには、いかに多くの罪があっても、無罪の判決が下されるからです**」。このあと、新聖歌３７６番「如何に汚れたる」を賛美します。その１番に、「如何に汚れたる　者の心をも　きよめ給う主は　げにほむべきかな　罪汚れは　いや増すとも　主の恵みもまた　いや増すなり」。私たちの罪がどんなに深くても、その私たちと一つになるために、人となり、十字架において私たち罪を負ってくださったキリストがおられる。だからこそ、私たちは罪と死の力がどんなに強くても、絶望することはない。角田兄弟が召される４ヶ月前、クリスマスに洗礼を受けました。それは、大きな悲しみの中でただ一つの慰めでした。キリストと結ばれて神の子とされた。私たちもそうであります。もはや、生まれながらの怒りの子、アダムの子ではありません。キリストに結ばれて、神の子とされている。この喜びの中に、この週も生かされてまいりたいと思います。

お祈りをいたします。

天の父なる神さま、あなたの御名を讃えま

す。

大坂力兄、また角田芳信兄が召されて1年が経つこのとき、あなたを見上げ、罪と死の力から私たちは解き放たれ、今、神の子ども とされている、その喜びの中に置いていてくださることを信じて感謝いたします。私たちのために人となり、十字架にかかってくださったお方を、「あなたこそ私の主、私の王です」とひれ伏します。愛する方々一人一人のその歩みをお支えください。

今日やむを得ず来ることができないでいる方々、特に大きな病を経て病床に伏せっておられる方がおられます。死を目の前にしておられる方がおられますけれども、神さま、どうぞあなたの慰めが姉妹とまたご主人さまの上に豊かにありますように心からお願いをいたします。

今日も東北教区の五つの教会の上に、弘前、三沢、築館、仙台、福島、裕子牧師が今日は築館教会に行っておりますが、築館の方々の礼拝を祝福してください。また、私たちの教会の献身者であります千葉和幸先生とご家族の上に、遣わされております岬教会の上に、主の豊かな祝福がありますようにお願いいたします。

主イエス・キリストのお名前によってお祈りをいたします。アーメン。

（仙台南光沢教会牧師　佐藤信人）